

2023年度 大学院奨励研究員研究報告書

2024年3月31日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	呉 松旆	印
-----	------	---

指導教員

所属・職名	社会学研究科・教授		
氏名	桑山 敬己	印	

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	都市における先住民族の歌と踊りの伝承による自文化表象に関する文化人類学的研究——札幌を拠点とするアイヌ古式舞踊の保存会を事例として
採用期間	2023年 4月 1日 ～ 2024年 3月 31日

研究科委員長・研究科長印	研究科受付印

提出先： 所属研究科事務

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	呉松旆	論文題目	アイヌの歌・踊りの伝承に関する一考察——札幌を拠点とするアイヌ古式舞踊の保存会を事例として（※発行時期は2023年3月であるが、2023年6月11日に2022年度北海道民族学会奨励賞を受賞したため、ここに掲載）		
	雑誌名	北海道民族学		巻号	発行年月	掲載頁
				19号	2023年3月	14~28

図書	著者名	陳其南 （藤川美代子、呉松旆 訳）	論文題目	特別寄稿 王崧興氏と彼の台湾人類学の時代		
	書名	王崧興『亀山島』と漢人社会研究——翻訳・論考・資料（仮）（日本文化人類学会・植松東アジア研究基金（令和3年度研究促進事業））風響社		発行年月	頁	
				2024年5月（予定）	総頁：頁数調整中 担当箇所：頁数調整中	

図書	著者名	王崧興 （川瀬由高、長沼さやか、稲澤努、藤川美代子、呉松旆 編訳）	論文題目	第1部〈翻訳編〉 亀山島——漢人漁村社会の研究		
	書名	王崧興『亀山島』と漢人社会研究——翻訳・論考・資料（仮）（日本文化人類学会・植松東アジア研究基金（令和3年度研究促進事業））風響社		発行年月	頁	
				2024年5月（予定）	総頁：頁数調整中 担当箇所：頁数調整中	

図書	著者名	瀬川昌久、西村一之、川瀬由高、長沼さやか、稲澤努、藤川美代子、呉松旆	論文題目	第2部〈論考篇〉『亀山島』を読む 第1章〈座談会〉『亀山島』を読む		
	書名	王崧興『亀山島』と漢人社会研究——翻訳・論考・資料（仮）（日本文化人類学会・植松東アジア研究基金（令和3年度研究促進事業））風響社		発行年月	頁	
				2024年5月（予定）	総頁：頁数調整中 担当箇所：頁数調整中	

図書	著者名	呉松旆	論文題目	第2部〈論考篇〉『亀山島』を読む 第4章 台湾の人類学と「自文化」研究——『亀山島』の今日的意義		
	書名	王崧興『亀山島』と漢人社会研究——翻訳・論考・資料（仮）（日本文化人類学会・植松東アジア研究基金（令和3年度研究促進事業））風響社		発行年月	頁	
				2024年5月（予定）	総頁：頁数調整中 担当箇所：頁数調整中	

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

(2) 学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	日本文化人類学会（第57回研究大会）	開催地	県立広島大学
題目	自文化表象としての〈札幌アイヌ〉の形成——A会によるアイヌ古式舞踊の披露に注目して	発表年月日	2023年6月3月

学会名	南山大学人類学研究所 第3回公開シンポジウム『王崧興『亀山島』と漢人社会研究』（共催：東アジア人類学研究会）	開催地	南山大学
題目	台湾の人類学と「自文化」研究	発表年月日	2023年12月26日

研究経過状況（3000字程度）

2023年度大学院奨励研究員採用期間内には博士学位申請論文の執筆に注力した。2023年11月末に「都市における先住民族の歌と踊りの伝承による自文化表象に関する文化人類学的研究——札幌を拠点とするアイヌ古式舞踊の保存会を事例として」と題した博士学位申請論文を提出し、2024年1月16日に行われた口頭試問を経て、2024年2月13日に博士学位（甲号）の授与が決定された。本論文の目次は以下の通り、7章から構成されている。

- 第1章 序論
- 第2章 北海道とアイヌ民族をめぐる植民地的状況
- 第3章 本論文の理論的枠組み——文化表象の三者構造
- 第4章 表象する者の登場——札幌ウポポ保存会
- 第5章 札幌ウポポ保存会が伝承しているアイヌの歌や踊りからみる札幌の特徴
- 第6章 自文化表象としての〈札幌アイヌ〉
——表象をみるものを意識した表象する者の実践
- 第7章 結論と今後の展望

本論文は、現代のアイヌが自発的に結成した、アイヌ古式舞踊の保護団体の構成団体である「札幌ウポポ保存会」を事例として、主に①同会の会員の出身地／出自の地域的多様性、②同会に伝承される歌と踊りの地域的多様性、③同会の主要な行事での演目選択、という三つの側面をめぐる関係性から、現代を生きる都市のアイヌがどのように自文化を表象してきた／いるのか、その同時代性(coevalness)を解明し、民族誌的および理論的貢献を目指した文化人類学的研究である。以下では、筆者の博士学位申請論文の概要を記述する。

第1章では、主に本論文が文化人類学的研究と称することに込められた含意について述べた。アイヌ古式舞踊については、先行研究として『アイヌ伝統音楽』（1965）や『北海道アイヌ古式舞踊』（1987）等の多くの貴重な蓄積があるが、それらは主に、アイヌ人口が多い日高、胆振、十勝、釧路、上川管内において伝承されてきた歌や踊りを中心に記録している。これらの先行研究に対して本論文は、従来殆ど検証されてこなかった担い手の構成という視点を加え、文化人類学的アイヌ研究の立場から、都市部のアイヌによる自文化表象の同時代性を提示することを目指している。

第2章では、アイヌ民族が自らの文化を抑圧されてから、自らの文化を復興するまでの歴史的・社会的背景を確認した。江戸時代後期から北海道が日本に包摂される過程において、アイヌが従来狩猟や漁撈、採集等の伝統的生業に利用してきた土地は国家により取り上げられ、再分配され、アイヌ民族の生活上の基盤、いわば彼らが自律的に暮らしてきたtraditional territoryは法的に否定された。続く明治時代には「北海道旧土人保護法」が制定され、それが約100年も実施され続けた結果、アイヌ文化は破壊的な影響を受けることになった。1980年代以降、世界で先住民族に対する関心が高まると、そのような国際的な動向を背景に、日本政府は「北海道旧土人保護法」（1899年）への反省として、「アイヌ文化振興法（略称）」（1997年）を経て、「アイヌ施策推進法（略称）」（2019年）を実施し、アイヌ文化の振興に注力してきた。先住権の視点から見れば、これらの法律は決して十分とはいえないが、アイヌ古式舞踊を含むアイヌ文化の伝承は、こうした戦後日本の時代的変遷とともに逞しく発展してきたのである。

第3章では、1980年代以降、文化人類学の中心的課題として浮上した文化表象における根本的な問題、すなわち異文化表象だけではなく自文化表象でも生じる「権威(authority)」をめぐる問題を、桑山敬己の「民族誌の三者構造」という概念を用いて検討した。そのうえで、民族誌の三者構造を批判的に継承し、「表象する者」「表象される者」「表象をみる者」からなる「文化表象の三者構造」という概念を展開しつつ、これまで「伝統の創造」や「文化の客体化」、「戦略的本質主義」といった議論に集約されてきた自文化表象の問題を再考し、本論文の主要研究協力団体である札幌ウポポ保存会による自文化表象を分析する理論的枠組みを確立した。発話のポジションを占める「表象する者」の権威は、異文化表象の場合はwas there/being thereに、自文化表象の場合、living thereに由来するが、「表象する者」が「表象をみる者」でもある状況、いわば、「表象を見る者」を意識することによって、「表象する者」の権威が限られるというのが本論文の基本的見方である。

第4章では、本論文の事例に応じた「文化表象の三者構造」の「表象する者」、つまり札幌ウポポ保存会の全体像を描き出した。本章の内容は令和2年度国立民族学博物館特別共同利用研究員としての研究活動に基づくものである。同会の歴代会員は、北海道内

各地の多様な地域に出身地／出自を持っている。このような出身地／出自の多様性は、同会が1979年に結成されてから一貫した顕著な特徴であると言える。また、会員自身の出身地もしくは出自（父母・祖父母の世代の会員の出身地）については、日高管内が最も多くを占めていることも結成当時から殆ど変わらない特徴として特筆すべきである。このように、会員の出身地は、時代が下るのに従い札幌に集中する傾向にあるが、出自という側面から見ると、地域的な多様性が依然として保たれていることがわかる。このような会員の出身地／出自における地域的な多様性が、同会の大きな特徴の一つである。

第5章では、同会で受け継がれるアイヌの歌や踊りの地域的な多様性について考察した。本章は『北海道民族学』第19号に掲載された拙稿「アイヌの歌・踊りの伝承に関する一考察——札幌を拠点とするアイヌ古式舞踊の保存会を事例として」を大幅に加筆修正したものである。同会は1990年代初頭に「アイヌ古式舞踊連合保存会」の構成団体として追加指定され、15の基本的演目を確立した。それらの演目は、石狩川流域に由来するものが最も多いが、別の様々な地域に由来するものもある。このような同会における演目の地域的な由来の多様性は、同会会員の出身地／出自に見られる地域的な多様性と深く関わっているが、必ずしも相応の関係があるとはいえない。つまり、ここには会員の出身地／出自と演目の由来という二つの異なる側面で地域的な多様性が認められる。このように、同会は、会員の出身地／出自と演目の由来という二重の意味において、それぞれ異なる多様な地域的な特徴を示していると言えるのである。

第6章では、アイヌ古式舞踊の披露を通して自文化を表象する同会によって表象され、かつ形成されていく〈札幌アイヌ〉の動的様相を明らかにした。本章は日本文化人類学会第57回研究大会の口頭発表「自文化表象としての〈札幌アイヌ〉の形成——A会によるアイヌ古式舞踊の披露に注目して」を大幅に加筆修正したものである。具体的には、同会が定期的に最も多く参加している「芸能交流会」と「アイヌ民族文化祭」二つの行事を取り上げ、文化表象の三者構造の概念を用いて、「誰が誰に向けて自文化をどのように表象するのか」という視点から、両行事における同会の披露演目の選定について考察した。他地域の保存会が参加しない場では演目の選択自由度がより高くなるのに対して、多くの地域の歌や踊りを伝承している同会は、アイヌ民族文化祭と芸能交流会のような他地域の保存会と共に出演する行事では、同一行事に参加する他の保存会の披露演目に配慮しながら、それらの演目と被らないように自文化としての〈札幌アイヌ〉を柔軟に表象している。これらの事例から、その基底には、自らがネイティブであることを相対化し、**living there**に由来するネイティブとしての権威を他地域の保存会と争うとしない、文化相対主義的な心構えがあると考えられる。

第7章では、本論文の民族誌的・理論的貢献を改めて明確にするとともに、今後の課題について論じて本論文を締めくくった。本論文は、札幌ウポポ保存会における二重の地域的な多様性を明らかにしたうえで、披露演目の選定という視点から、〈札幌アイヌ〉という同会の自文化表象のダイナミズムを論じた。「文化表象の三者構造」を発展し、それを通して、自文化表象における権威の問題をめぐって検討してきた。本論文で得た知見は、人類学者がいかに先住民族の自文化表象を捉えるのかという文化人類学の学問的発展に寄与することが期待できる。今後の課題として、北海道以外の都市部におけるアイヌ文化の伝承活動や、海外の先住民族との交流において、同会も含め、多くのアイヌ古式舞踊の保存会がいかに自文化を表象するのかについても、深く掘り下げる予定である。また、アイヌが先住民族としてどのように自らの歌や踊りを自己決定的に伝承し続けていくのかについて動向を見守っていきたい。

なお、2023年度大学院奨励研究員採用期間内には、博士学位申請論文の執筆の傍ら、日本の台湾・中国研究者と共同研究を重ねながら、故・王崧興教授の『龜山島——漢人漁村社會之研究』（1967）の翻訳・解説等の出版作業に共編訳者として携わった（※研究発表状況における「図書」として掲載したもの）。

謝辞：2024年3月16日、社会学研究科後期課程学位記受領代表者として学位記を頂きました。また、社会学研究科委員長賞を拝受いたしました。博士学位申請論文の執筆をはじめ、2023年度の研究成果にあたり、大学院奨励研究員制度に多大なるご支援を賜りました。この場をお借りして心より深く感謝申し上げます。

以上